



No. 118

ティー・ブレイク

## Tea Break

新しい世界

例えば、ある航空会社のマイレージ制度。所定数のマイルをためると、無料の航空券等がもらえたりする。だからこそ、その航空会社の航空便を必死になって利用し、マイルをためようとする。これはどこでも見られる光景ではあるが、会社の経費で行く際にも、採算等を度外視して、自分がマイレージ登録しているところを利用するようになってくると、それはもはや病的である。

そうして、こうした人たちは、困ったことに、自分がもはやマイレージの奴隷となってしまうことに全く気付かない。更に困ったことには、こういった奴隷たちは、奴隷になって奴隷的な行動をすることを人に勧め、そうでない人を「おかしい」とすら思うことである。だから、そういった人たちは、マイレージをやってない人にそうすることを勧め、そうしていない人を馬鹿にする。

でも、そんなことは我々には関係ない、と思われる方が大半であるかもしれないが、果たしてそうであろうか。例えば、弁理士資格を持った新人は、資格を取る前までは「今までに居なかったような弁理士になる」と思っていたものが、資格を取ったとたんに「弁理士になった以上は、明細書が書けるようにならなければ！」と思うようになり、転職を真剣に考えるようになる。

普通であれば、資格を取ったのであれば、やれることや選択肢が広がるはずである。けれども、現実には、弁理士資格を取ったがために選択肢が狭まってしまう例が、後を絶たない。

けれども、このような「資格の奴隷」になってしまうことは、弁理士倫理などと混同をしやすいために、現実的には深刻である。

しかしながら、うけた仕事を誠実かつ完璧にこなすのは職業倫理以前の当たり前のことである。そして、そのようにしている人は大勢居るが、そういった人の選択肢が狭まっていることは、あまり聞かない。むしろ、弁理士のような専権資格を取った人に多いのではあるまいか。

実際に、うけた仕事を誠実にこなし、またそうするための基礎的能力を身に着けることと、ある資格にとらわれて「やることの選択肢が狭まってしまう」というのは、次元の異なる話である。

では、奴隷から抜け出すにはどのようにすればよいのだろうか。一つには、目的を達成して呪縛から開放される、というのがある。他の一つは、やはりこれは、本人が「奴隷」であることを自覚して、そこから逃げ出すしかない、ということである。

けれども、何度も言うが、奴隷というのは、傍から見ればそうであることが明白であるにしても、本人というのは絶対にそうだとは思っていない。そしてそれが大きな難点である。けれども、客観的に自分を見つめなおす機会さえできれば、それは比較的容易である。

そしてそのためには、「別の職業についてみる」というのが最も効果的なのであろうが、そこまでしなくても、大学等に行って異業種と交流してみる、というのも良いであろう。ただ、霞ヶ関あたりを離れてみて、外部からそこを見えてみるだけでも、大いに視点が変わるものである。

実際に、秋葉原クロスフィールドあたりで行なわれている知財ビジネス関係の研修会やゼミなどに参加してみて、そこから霞ヶ関・虎ノ門方面を眺めてみるというのも、それはそれで一興なのではないだろうか。

(正)